

離れて近づいて ~infinite world~

月島柊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現実世界からinfinite worldにきた蒼たち。そこには「infinite」の意味が分かる世界が……

さらには新たな出会いや、世界が誕生した経緯が明らかに!?

1期「離れて近づいて」の続編、「離れて近づいて infinite world」が始まる!

目次

第1話	i n f i n i t e	1
第2話	r e a l	7
第3話	m y s t e r y	10
第4話	s n i p e r	14
第5話	M s . Y u k i	18
第6話	f i r s t m e e t i n g	21
第7話	w i t h y o u	25
第8話	E x p u l s i o n	28
第9話	U n k n o w n B o w	31
第10話	T h e c u t e s t	34
第11話	裏切り	37

第1話 i n f i n i t e

俺たちは武器屋に武器をそろえに向かった。まあ、そうは言っても序盤だから弱いものになるが。

「おう！何がほしい」

「片手直剣と弓と矢、矢筒」

「分かった。片手直剣はこいつでいいかな。始まったばかりだから強いのがなくてな」

確かにリリースしてから1日も経ってないな。これでいいだろう。

「ああ。弓矢は」

「ヒスタルボウがある。射程は人によって変わるが、70mはあるな」

弓は結構きれいな見た目だった。水色で光沢のある綺麗な柄。

「矢と矢筒はヒスタルボウの付属だな。300発あるから、結構持つだろう」

「分かった。どんくらいだ、C o l は」

「本来ノーマルソード20c o l、ヒスタルボウとヒスタルアロウで60c o l、矢筒で20c o lの合計100c o l何だが、2人が親切なのと、かつこいいしかわいいのに免じて、この店では80%値引いてやる」

この店ではって、ずっとか？

「ずっとか？」

「ああ、ずっとだ。だから、今回は合計20c o l」

店の人は手を出す。俺はその手に20c o l乗せると、店の人はにっこりと笑い、俺たちに言った。

「ただし、材料はたまに頼むからな」

「いいさ、いつでもどうぞ」

「そうか。んじゃ、また来てな」

俺は有希と一緒にフィールドに出た。

有希は少し不安そうにしていたが、手をつなぐと安心したように笑った。

「蒼くん、この手、離さないでね？」

「もちろん」

「ふふっ、手にキスしてもいいんだよ？」

手にキスかあ。フィールド出てからにしようかな。

フィールドは草原で、どこまでも続いていそうだった。川も流れていて、自然が多い。

モンスターはイノシシや弓使い、剣使いが多い。ボスなんていなさそう。

「んじゃ」

俺は繋いでいた有希の手にキスをした。

「ふふっ、頑張っちゃお！」

有希は弓を構え、遠くの敵を攻撃する。もちろんのこと当たるが。エイムが俺より高いんだから。

「ナイス。じゃあとどめは俺が」

俺は地面を蹴り、素早く斬った。斬り捨てと言われるやつだろうか。

言ってなかったが、経験値は。パーティーを組んでいるため、ちゃんと誰が倒しても同じ数の経験値は入ってくる。ストレージもプライベートルストレージを除いて共有化される。

「350か……」

「あと210だね。あと1体くらいやろっか」

俺は少し進んで剣使いのところに向かった。リーチが長い……防具なしだと厳しいか？

「マジすか……」

俺は一か八か剣を投げてみた。

案の定、敵に捕まれて二刀流状態に。

「なんてこったい」

「蒼くん！スイツチ」

俺は後ろに下がった。すると、背後から矢が2発飛んできて、敵がすぐに倒れた。俺の剣だけが落下し、拾い上げた。

「サンキュー、有希」

「無茶なことしちゃ、メッ！」

有希の人差し指が俺の口に触れた。

「あ、悪い。んじゃ、ちよつと周り歩いてレベリングしようか。中途半端に残っちゃったし」

残り16でレベル2だ。

すると、俺の視界の目の前に敵に囲まれた少女がいた。少女は為す術もなく、ただ座っていた。

「有希」

「うん」

俺は近接戦に、有希は遠距離で闘い始めた。3体くらいいて、とても1人じゃ無理だった。

「ふっ」

俺は剣を片手で振る。敵のヘイトが俺に向く。その隙に、有希に合図を送り、少女から敵を離す。

「おっと」

度々攻撃されそうになるが、どうにか剣で防いでいた。

有希の遠距離が終わると、合図が見えた。スイッチの合図だ。俺は残りHPが少なくなつた敵を一掃する。

レベルは2に上がり、それぞれのパラメータが10%上昇した。

「大丈夫か」

「あ、はい。助けてくださりありがとうございます」

「ああ、いいよ。別に。名前はM i n a っていうのか」

「はい。美しいに野菜の菜で美菜です」

へえ、というか、レベルは俺たちと同じなのか。

そこに、遅れてきた有希がやってくる。

「美菜ちゃん！よろしくね」

「早速なんだが、パーティー組まないか」

「え、いいの!?!あ……」

「ふふっ、いいよ、ため口で」

レベリングも捗るだろう。

「どうする、美菜」

「じゃあ、組む。お願いします」

美菜からパーティー申請を受け取り、俺は許可した。M i n a、レベル2、魔法使い、片手剣(ダガー)と書かれていて、俺たちに近かった。

「うっし、素材は……レザー10個、鉄3個だな。ノーマルアロウがあるが」

「使う!」

「んじゃノーマルアロウはあげるよ」

俺は有希にノーマルアロウだけを送った。じゃああの店に戻って素材やるか。

素材をあげる店は剣を買った店と同じ店だ。店主は俺の顔を見るなり、大きく手を振った。

「なんだ、もう素材入ったのか」

「レザーとかだが」

俺は戦利品を全て出した。

「ああ……この鉄はもらっておこう。ただ、このレザーは防具屋じゃないとな。君たち、防具無いんだったら西の方にある防具屋行ってみたらどうだ」

防具か。確かにあったほうがいいかもしれないな。

「分かった。じゃあな」

俺は2人と一緒に西に向かって歩いた。

「蒼くん、どういう防具買うの?」

「防御力が高いやつがいいな」

俺は防具を買いに行った。一回フィールドに出てから入った方がいいな。

フィールドにはいり、モンスターを倒しながら西側に向かった。レベルは上がらなかつたが、俺はかなり倒した感じがしていた。

防具屋の周りは田んぼが多く広がっていた。防具屋も結構種類が多かった。

「これをあげに来た。あと、防御力120くらいのやつあるか」

「あるわよ。ブライドエナサーでいい?135くらいだけ」

「いい。それを3つ」

ああ、結構値段張りそうだなあ。

「1つで27c001だから、合計71c001ね」

71c001かあ……まあ払えなくはない。

「80c001でおつり」

「はい、9c001ね。またいつでも来てねっ」

なんか悪魔の微笑みに見える。所持金あと25c001なんだが。

「蒼くん、あと何c001?」

「あと25c001。有希は」

「48c001」

「私39c001」

一番持っていないじゃん、俺。やっぱクエスト受注するか。多分働く次に効率いいし。

中心の都市に戻ると、俺は掲示板を見に行った。レベル2でも受けられるクエストっていうと……

「森の襲撃者討伐をお願いしたい?」

「最初のフィールドの北西にある森だな。報酬も300c001で結構良いし、これにしよう」

俺はクエストを受注し、フィールドに出た。

北西に向かって走ると、討伐対象の「ガーハンコール」が数体いた。討伐数は15体。おそらく時間もかからない。

「美菜、俺と一緒に前に出て戦おう。有希はいつも通り後衛で」

「分かった」

俺と美菜は前に向かって走る。敵の攻撃方法は剣だけ。全然いけるだろう。

5分もしないうちに終わり、自動的に報酬の鉄板47個と経験値1024、そして1人300c001が入ってきた。

「もうレベル4だよ!やったね」

「あと463でレベル5だしな。レベリングにも使えそうだ」

全員レベル4になり、攻撃力などが上がる。

「帰る?」

「そうだな。帰ろうか」

ログアウトしてもうそろそろ咲希と話そう。

「んじゃ、戻ろっか」

俺と有希はその場からログアウトしようとする。

「じゃあ私も」

美菜もログアウトしようとしたところで、全員一斉にログアウトした。

第2話 real

俺が現実世界に戻ったのは夕飯の時間。自分の部屋でログインしたから自分の部屋に戻ってきた。

咲希は俺の近くにいないらしく、足音も聞こえない。

すると、外から足音が聞こえ始め、俺はドアを開けて外を見た。

「お、蒼くん。戻ったんだ」

有希だった。

外は生活音が聞こえ、おそらく咲希が何かしてるんだろう。

「咲希、何してるんだろうな」

「夕飯作ってるんじゃない？」

そうか。夕飯の時間だからそうかもな。

「あれ、俺たちの分あるのか？」

「あ、確かに」

俺と有希は顔を見合わせた。やっぱりそうだよな？

「一応行ってみる？」

「そうすっか」

俺は有希の後を付いていくようにして咲希であろう音のする1階へ降りた。案の定、音の正体は咲希が夕飯を作っている音だった。

「ただいまっ、咲希」

「わわっ、お姉ちゃん！それに、お兄ちゃんも！」

俺は「ちっす」と右手を挙げた。咲希は包丁を内側に置いて、まな板から離れたところで有希に抱きついた。

「おかえりっ！夕飯丁度作ってたよ。食べよう？」

「うん、食べよっか」

有希は咲希と一緒に椅子に座った。俺も付いて行って、咲希の向かい側に座った。

「ねえねえ、infinite world どうだった？」

infinite worldの話になった。

「戦闘とかあつて楽しいぞ。他の人たちも優しいしな」

「そうそう。それに、綺麗なお花畑とか森とかもあるよ」

咲希は目をキラキラさせて言った。

「いいなあ、私も行きたい！」

咲希は前のめりになって言う。

「無理だよ。インフィニットギアが2個しかないんだから」

「そうそう。待ってて?ここで」

咲希は俺たちに言われてブルーと口をとがらせて言った。

「むーっ、まあいつか。夕飯食べよ」

咲希は夕飯を俺たちの前に持つてくる。俺は先が用意した夕飯を頬張る。

「おいしいね。俺たちが戻ってくるの分かってたのか」

「うんっ！お兄ちゃんとお姉ちゃん、1日でもどつてくるだろうなっ
て」

なんか思つてくれて嬉しうな。有希も心なしかにこにこしてそ
うだ。

「あ、そうだっ、お兄ちゃん、infinite worldで1番の
最強プレイヤーつて言われてたよ！」

え、そうなの?レベル4なんだけど。普通に周りにはレベル6のプ
レイヤーとかレベル12のプレイヤーとかいるけど。

「攻撃力と防御力の合計が1番高いんだって」

「蒼くんなんだあ。なんか嬉しっ」

「俺も嬉しいな。そうか、最強か」

俺はなんか照れくさくなつた。

「なんかそういう人がお兄ちゃんつて嬉しい」

みんな喜んでるな。俺が1番になつたんだけど。すると、咲希は咳
払いをして言った。

「そこでっ！会える時間が少ないからどつちかと一緒に寝たいの！」
なにがそこでなのか分からないが。提案は良いと思つた。

「それで、誰と一緒に寝るんだ」

咲希はしばらく悩んでから、ひらめいたように少し大きな声で言つ
た。

「じゃんけんでいいんじゃない?」

「じゃんけん？私勝っちゃうよ？」

「それはそれでいいよ」

俺は有希と向かい合ってじゃんけんをした。

「最初はグー、じゃんけんポイ！」

有希がかけ声をした。

俺がチョキ、有希がチョキであいこだ。

「あいこでしょ！」

再びグー同士であってしまふ。気があつてるのか分からなくなつてくる。

「あいこでしょ！」

やっと決着が付き、俺がパー、有希がグーで俺が勝つた。

「じゃあお兄ちゃんが一緒に寝る！」

「あ、勝つた方なんだ」

結局、俺と一緒に寝ることになりませ俺は少し急ぎめで夕飯を食べた。

夜になつて、俺は咲希と手をつないで自分の部屋に入った。咲希は俺と一緒に横になると、すぐに離れまいと足まで絡ませてきた。

「お兄ちゃんのこと、抱いてると気持ちいい……」

「褒めてるのか？」

「うん。褒めてるよー」

咲希は「ふふーっ」と言つて俺の胸に顔を押しつける。

俺はしばらくしてから咲希に話しかける。

「咲希、明日も——」

しかし、咲希はもうすつかり寝ていた。疲れてたのかな。ゆつくり寝かせてあげよう。

「おやすみ、咲希」

俺は優しく抱き包んだ。

第3話 m y s t e r y

起きた時間は結構遅かった。いつの間にか咲希はどこかに行ってるし、ホント、「いつの間にか」が多い人だな。まあ別にいいんだが、俺は有希に会うため、部屋から出た。どこにいるかは知らないが、俺の中のセンサーがリビングだと指している。俺はリビングに向かった。

案の定、有希はリビングのソファでごろごろしていた。

「有希」

「あ、蒼くん。おはよ」

「おはよ」

有希は立ち上がって、すぐに俺にくっついて上目遣いしてきた。

「行く?」

なんかいやらしく聞こえなくもないが、気のせいだ。気のせい。

「行こうか」

「行ってらっしゃい」

咲希がクツションの上で言った。

「行ってきます」

俺は自分の部屋に向かって、入るとインフィニットギアをつけた。

〈準備オツケー!〉

有希から連絡が来る。俺はリンクスタートした。

初期スポーンは宿屋に設定していて、有希も同じところにスポーンした。

「さて、美菜を探すか」

「そうだね」

俺は有希と一緒に美菜を探し回った。多分1階に……

「いた!」

「あ、いた!蒼くん!有希ちゃん!」

美菜がこつちに寄ってくる。

「蒼くん、見てみて。剣新しいの買ったの」

攻撃力が今までの+50か。って、それ以外にもあるじゃないか!

回復量＋30%とか防御力＋40とか。強いなあ、美菜の剣。

「見た目もいいし、いいんじゃないか」

「わーいっ！」

「私も転職しようかなあ」

「何にだ？」

有希は少し焦って俺に言った。

「いや、あの、追加でスナイパーも取得したいなあって」

「追加ってできるのか？」

「分かんない」

「こう言うときのエムだよな。」

エム、出番だよ

「はい。どうしました？」

武器の種類って、追加することできるのか？

「一定戦闘力があれば上限をあげられます。戦力2000で3種類、5000で4種類にあげられます。戦力は攻撃力と防御力の合計値で、蒼くんの場合は976です」

ありがとうございます。もういいよ

さて、じゃあ有希に説明するか。

「攻撃力と防御力の合計が2000になったらだって」

「今は……960」

「私868」

みんな全然足りていない。レベルを上げるか、武器の強さを上げるか。レベリングの方がいいのかな。

「というわけで、レベリング行くぞ」

『おーっ！』

2人同時に言った。

レベリングのところは敵のレベルが7前後の場所。平原が広がっている。

「美菜、回復に徹してくれるか？」

「うん。あ、これ渡しとくね」

美菜がくれたのは回復ポーション。

「助かるよ。有希はどんどんちよっかい出して」

「はーい！」

有希は高台に上り、弓矢で数体の敵をおびき寄せる。
「いくか」

俺は集まって敵の群れに剣を構えて突っ込んでいく。

ぐあああつ、と声を出して次々と死んでいく。経験値は500。

「やった！レベル上がった！」

「戦力1000超えたかも」

俺はつぶやいた。計算すると、1074だった。

「私も超えてるかも」

有希は自分の攻撃力を見て言った。

「1056！」

「私ギリギリ999だった……」

「大丈夫さ。まだ時間あるから」

俺がそう言うと、美菜は「そうだよね」と言って、メニューを閉じた。

「あ、あの、ちよつといいですか？」

横から俺たちと同じくらいの女の人が話しかけてきた。

「はい。どうしました？」

「あの、すみません。パーティー、組んでくれませんかっ！」

いきなり何を言い出すかと思ったら。なんでパーティー組もうな
んて。

「どうしたんだ、急に」

「あの、さつきまでパーティーに入ってたんですけど、外されちゃっ
て」

あらら、かわいそうに。俺のパーティーに入れてあげないと。

「いいよ。名前は」

「サキです」

サキ？なんか聞き覚えのある名前だな。

「サキちゃん、よろしくね。私美菜」

「私は有希。よろしくね」

「俺は蒼。気軽に呼んでくれ」

俺がサキの情報を確認しても、やはり「S a k i」と書かれていた。しかも、レベルは1。まだまだ強くなれたのに追い出されたのか。

「専属武器は銃か。それ以外にはないっほいな」

「うん。今はI35—1を使ってます」

銃はよく分からん。多分初期武器だろう。

「サキちゃん、行く？」

「うん」

サキと美菜は先に行った。有希も行こうとしたが、俺は有希を止めた。

「有希、あのサキって名乗る人、妹じゃないよな」

「違うでしょ。インフイニットギア持ってないし」

「そうだよな。けど、気になるな」

有希は「心配しないで」と言って走って付いていった。やっぱり、過剰に想像しすぎたか。

町に着くと宿屋に行き、サキの分の部屋を取った後部屋に全員が戻った。俺と有希だけ同じ部屋で、それ以外は個人部屋。

「蒼くん、ハグしよっ」

「最近できてなかったっけ。いいよ」

有希はぎゅつと柔らかくハグした。

「楽しいか」

「うん。蒼くんと一緒にいれるし」

有希はハグしたまま言った。

第4話 sniper

俺は翌朝起きると、すぐにサキ、美菜、有希と一緒にレベリングへ向かった。

つと、その前に銃を買わないと。サキがかわいそうだ。サキはこれを聞くと、喜んで飛び出した。

「どういう銃がいいんだ」

「ライフルとか、連射系かな」

「対物狙撃銃じゃないんだ」

有希がぼそつとつぶやいた。

「確かに対物狙撃銃もいいんだけど、重量がね。あと弾数が少ない」
プロっぽいな。

銃の店に着くと、サキに3つほど銃を持たせ、試し打ちさせた。

「うーん、あの、弾数って何発ですか」

「50発です。少なめですがね」

「射程は多分500mだと思うので、他の連射系の銃をお願いします」
「分かりました。それでは、このSHO4―3はどうでしょう」

なんか専門用語が飛び交っているような気がするなあ。

「これって、バフなんか付きます?」

「攻撃力+340、エイム値+25%ですね」

「お代は」

「サプレッサー付で11500、無しで7000です」

サプレッサー?なんだそれ。高くなるらしいが。

「ぐぬぬ……じゃあ、無しで」

「7000です」

サキは所持金を見て、おつりをもらう。銃を大事そうに抱えながらこつちに来た。

「ゲット!早速試そ!」

「おう。クエスト受注しちやおうか」

俺は「モンスター大量発生防止の手伝い」というクエストを受けた。報酬は15000と、経験値2000。多分サキはレベル4くら

いになるだろう。

「蒼くん、銃とかの遠距離使う人増えたけど、盾装備しないの？片手直剣のメリットつて盾を装備できることじゃん」

「ああ、今あのことが気付かれるとなあ。」

「まあ、重量の問題だよ」

「なんかわざとらしい言い訳だったかな。」

「そっか。軽い方が良く動くしね」

「あ、気付かれてないっぽい。よかった。」

俺はクエストを受けたあと、クエストの場所に転移した。

クエスト内容は「コースタナボーン」というモンスターを20体討伐するという内容。レベルは俺たちより若干上だったが、レベル1のサキは1体倒すだけでレベル2へ上がる。

「1回当たり500くらいの経験値か。ということは、10000と20000が入るのか」

「多いね。サキちゃんレベル一気に上がるじゃん」

「そうだね！よーっし！」

サキは早速買った銃を使い始めた。500m離れているだろうか。よく当てられるもんだ。

「おお、倒せた」

「やった！さすが連射！」

俺は敵に近づいていって、普通に斬った。俺は近接戦なんでね。「ついでだっ」

俺は4体にもダメージを与えた。あとはサキか美菜、有希がどうかしてくれるはず。

「スイッチー！美菜」

「オツケー」

美菜は力を込めて1体の敵のところへ向かった。

「やった！成功！」

「よかったな。あ、そうだ。試してみたいことがある。もしかしたら全滅するかも」

「いいよ！なにになに!？」

俺は試験段階だが、爆発魔法を使う。敵に向けて少し前に発動させる。発動まで3秒かかり、地面は破壊しない。

爆発音とともに爆風が来ると、敵の姿はなかった。そして、経験値が大量に入り、クエストボーナスも入る。そして、クエスト隠れボーナスで片手直剣が入ってきた。

「サインフェニア？って、おお、綺麗だし、攻撃力もこの剣より600高い！」

強い。一気に強くなった。1409まで上がったし、

「レベルも私たち7になったよ！サキちゃんも5だね」

俺はもうそんなことどうでもよくて、とりあえず剣の観察。

「これ、防御力も500ついている。もうすごいな」

レベルを含めれば2076か。って、ん？

「戦力2000達成、おめでどうございます！もう1つ専属武器を選べます。どうしますか？」

そうだな、スナイパーでもやりたいな。

「スナイパーですね。3つめですので、攻撃力+80%でスタートします」

了解

俺はスナイパー、片手直剣、魔法使いの3つが揃い、攻撃力がかなり高くなった。

「蒼くん、おめでどう」

「スナイパーだってね。パーティーの通知に書いてあったよ」

美菜が言う。通知が来るんだ。初めて知った。

「蒼くん、エイム大丈夫？」

「まあまあ。多分平気」

俺は後で銃を買うとして、とりあえず宿屋に帰ることにした。

俺が宿屋に帰ると、少し遅れて有希が戻ってきた。

「サキと美菜は」

「サキちゃんは用事で帰ったよ。美菜ちゃんは武器を新しく買った後に帰るって」

みんな用事があるんだなあ。大変そうだ。俺たちは楽にしてるけ

どなあ。なんかするか。

「武器の整理しようぜ。要らないやつは共有ストレージに入れたり、収納箱に閉まったりして」

「うん。あ、片手直剣と銃は蒼くんに渡すね」

「じゃあ俺は細剣と弓があつたら渡す」

俺は細剣、弓と片手直剣とその他に分けた。

「蒼くん、盾いる？」

「っ！」

俺は少し反応した。

「いや、いらない」

「そっか」

俺は有希に冷たい態度を取ってしまったような気がした。なぜだろう、直感的に……

「すまん、有希。これ、有希にやるよ。俺の分は共有ストレージに入れておいてくれ……俺は先に帰るよ」

俺は返事を待たずして、リアルに帰ってしまった。

第5話 M s. Y u k i

言い出さずに戻ってきたのはいくら何でも悪かっただろうか。

俺はまだ昼間なのに、自分の部屋にいた。それは全て自分のせいなんだけど。

ただ教えたくないだけなのに。

俺は気分転換に外に出てみた。

「眩しっ」

強烈な紫外線が俺を痛めつける。なんで俺はこんなにも紫外線に弱いのだろう。

冬になっても気温は中々下がらず、まだ25℃あった。11月に入ったのに25℃なんてどうかしている。その分、1月や2月は途轍もなく寒い。下がったときだと最高が2℃の日があった。

おっと、こんなことより気分転換だ。

「お兄ちゃん！何してるの？」

「ちよつと有希に悪いことしちやつてな。気分転換だ」

「え？お姉ちゃんいるよ？」

咲希に会ったと思ったたら有希もいたのか？だったら、今すぐにでも謝ろうかな。

「蒼くんっ」

「あ、有希。ごめん、急に帰ったりして」

「もう気にしてないよ。なんかあったんでしょ？相談してもいいのに」

有希は俺にぎゅっと抱きついたまま言った。

「あ、有希……じゃあ、いいかな」

「うにゅ」

俺は有希に相談した。

「俺、いつの間にか『双剣』ってスキル手に入れてるんだけど、これ、攻略組の1人が持つてるらしいんだ」

「攻略組って、ゲームに沿わない行動をしてもダンジョンに登るっていつ？」

有希も存在は知っているらしい。

「そう。それで、その人の顔は誰も見たことがない。だから、俺が使つてると疑われるかもしれない。だけど、有希たちを守るには必要なスキルだ」

「だから悩んでるの？」

「そういうこと」

有希は俺の目を見つめて言った。

「今、2つの武器使えるじゃん。それでいいよ。守るのは。それに、気付かれて、疑われても蒼くんを味方だと思ってる人はたくさんいるよ。サーバー1位なんだから」

有希は俺の頭を撫でて言った。有希っていつから俺を守れるようになったんだろう。救われた気がした。

「……ありがとう、自信が持てたよ」

「いいよ。蒼くん」

有希は胸に俺の顔を埋める。安心できる環境だ。

「お姉ちゃん、色仕掛け？」

「違うっ！安心させてるの！」

「じゃあ私もっ」

咲希が反対側から胸を押しつける。柔らかい…じゃなくて、なんだこの状態は。

「絶対咲希は色仕掛けでしょ」

「違うもーん、安心させてるもーん」

いや、咲希は色仕掛けだ。絶対。

というか、いつまで俺を胸で挟んでいるんだ。

「有希、咲希、離して……」

「あつ、ごめん！」

有希と咲希はさつと離れた。俺は有希の手を掴み、手を揉んだ。

「揉んでるっ？」

「ああ、さつきくっついてて思い出したんだが、有希って手強くないんだな」

「ゲーム内では指が怪我しないように保護してるし、力を入れてない」

し」

なんか心配性みたいになっちゃったけど。

「そうなんだ…」

「いつまで触ってるの」

有希が笑いながら言った。

「あ」

「無意識？ちゃんと愛してよ？」

ああ、無意識だった。

って、ん？最後なんて言った？「ちゃんと愛してよ」って言ったか？いや、もしかしたら「ちゃんとしてよ」かもしれぬ。

「愛してくれないと泣いちゃうからね」

聞き間違いじゃないらしい。

「愛しますよ。そこまでいわれたら」

俺は有希に微笑んだ。

第6話 first meeting

仮想世界で出会った、武器屋のテグリス、パーティーメンバーの美菜、サキ。この人たちは現実世界であったことがない。仮想世界でしか会ったことがないのだ。

有希の来ているところは同じだから分かるが、他のプレイヤーがどこからログインしているかなんて分からない。というか、もつといえは美菜とサキが現実世界で女性なのかすら分からない。テグリスは多分男性だろうけど。

そこで、俺は近くの居酒屋で、「第一回、infinite world オフ会」を開催することにした。

参加メンバーはさつき挙げた3人と俺と有希。5人だけだが、十分だろう。

そして、俺は早速会場に向かった。最寄り駅は横浜線成瀬駅で、俺は東海道線で横浜まで行き、横浜線で成瀬まで。有希は用事で小岩に行っていたため、新宿まで総武線で移動し、小田急で町田、町田から横浜線で成瀬まで来ていた。

20時頃、全員が集まり、オフ会は始まった。全員社会人で、特に驚いたのは……

サキが妹の咲希であったことだ。

「咲希、お前だったのかよ」

「ごめん。お兄ちゃん」

「来るとき会ってなかっただろう」

「だって相模線と小田急、横浜線で来たんだもん」
会わないためか。

「あ、私は多分この中だと遠いかも。上大岡で、ここまでブルーラインと横浜線で来てるので」

美菜だ。

「まず、本名知りたくないか。俺は影山蒼。こっちが影山有希、それで影山咲希」

「私二野美波。よく『にの』って呼ばれてる」

「俺は高橋健二だ。仮想世界の名前はなんとなくだ」
みんな優しそうな人だった。

「おう、俺は流山市に住んでてな、ここまでは流鉄流山線の流山から馬橋までいって、そこからずーっと小田急まで来て、町田で横浜線だ」
「私と代々木上原から一緒だったよ」

有希が言った。

「そうだったな！」

健二は相変わらず大きく強い声だ。

「健二、筋トレかなんかしてるのか」

「俺はジムのトレーナーだからな！当然さ！」

ジムのトレーナーなのかよ。だからその筋肉。

「美波ちゃんは何の仕事してるの？」

「デザイナー。多くはお店のロゴとかなんだけどね」

「すごいじゃん。どんな店なんだ」

俺は美波に聞いた。

「ペットショップとか。今は確か町田と飯田橋にあるんだけど、店舗によってロゴが違うから楽しかったよ」

「いいなあ、絵心がないからなあ」

有希が羨ましそうに言う。

「有希ちゃんは何の仕事？」

「電車の情報処理。機械は苦手だから、たまに蒼くんに教えて貰ってる」

「情報処理かあ。すごいなあ」

初めて言われた。

あ、帰る時間決めないと。

「みんな何時に帰らなきゃいけないんだ」

「最終でいいから、22時半だ」

健二は遠いからそんなもんだらう。

「23時半くらい。東神奈川から歩き」

「私たちも同じ電車かな」

「そうだな。23：44の東神奈川行き」

咲希と俺、美波は同じ電車だった。

「今日は小岩のお友達の家泊まるから、23:32の電車」
みんな帰る時間はバラバラだな。

「あ、待った。もうちよつと長くいれそうだ」
「なんで」

「流山じゃなくて南流山から歩くんだ！運動にもなるしな！」
相変わらず運動なんだな。

「すみません、唐揚げ5人分」

「いいの？お金とか」

「山分けか？」

そうすると1人4000円前後になるが。

「えつと……」

「冗談だよ。俺が払う。月に100万とか無駄に貰ってるからな」

「太っ腹だな！蒼！」

健二が俺の背中をたたく。

「強い！」

「大丈夫？蒼くん」

美波が俺の背中をさする。

「健二、強いよ」

「あつはつは、すまん」

反省してるのか？別にいいけど。

「あつ、そういえば、次いつみんな行ける？仮想世界」

「俺と咲希は次の土曜と日曜」

「私も土日」

健二はカレンダーをバックから取り出して、指でなぞりながら言った。

「しばらくは行けるな。武器屋をやってるのもあるが」

「私は土日」

みんなが集まれるのは土日ってことか。

「あつ、グレイプ酒2つ！」

有希は店員さんに言った。2つって、咲希もかな。

「俺レモン酒でいいや。健二たちは」

「俺はビールだな！」

「私、グレープソーダ」

「お酒嫌いなのか？」

子どもっぽい身長だけど、絶対言ったら怒られる。

「うん。小柄なのもあると思うけど」

自分から言っちゃうのな。

「小柄でかわいいじゃんっ！小動物みたい」

「え、そう？」

嬉しそう。美波は有希に頭を撫でられながら照れている。

「はっはっは、美波たちは仲がいいんだな！」

「あ、俺たち仲良くない？」

「そんなわけないだろう！相棒！」

相棒なんて、俺は言った覚えがないんだが。

「あー、はいはい」

「そうだ！明日、店に来れるか」

「ん？行けるが」

「少し手伝って貰いたいことがあってな、明日午後手伝ってほしいんだ」

なんか武器の関係でもやるんかな。

「いいぜ。明日な」

「そうだ。待ってるからな」

俺は健二と唐揚げをつまんだ。

第7話 With you

オフ会が終わり、俺、咲希、美波は同じ電車で家に帰っていた。美波は東神奈川で降り、京急東神奈川まで歩き、上大岡に帰るらしい。東神奈川で俺たちが電車から降り、俺は別れの挨拶を言おうとした。

「じゃあな。また明日」

「……ね、泊まつちやダメ？なんか、別れたくないの」

泊まるかあ。俺はいいけど、咲希はどうなんだろう。

「咲希はいいか」

「いいよ。ダメな理由がないし」

「じゃあ、いいよ。あと、俺たち、東海道線の終電だけど、忘れ物ないか」

東海道線最終平塚行きで帰る。このあと、大船より先に行く電車はない。大船だったら根岸線各駅停車大船行き、横須賀線普通大船行きがあるが、藤沢以遠はもう電車がな。藤沢だったら成瀬から小田急経由で行けばもっと遅い電車はあるが、JR経由だとこれが最終。

「無いと思う」

「そっか。じゃあいいけど」

美波は俺についてきて、京浜東北線各駅停車磯子行きに乗った。次の横浜まで乗車する。

「蒼くん、遠距離は何で選んだの？」

「ん？スナイパーのことか？」

「うん。意地でも近距離のイメージだったから」

確かにそういう感じだな。

「一応拳銃くらいは使いたいからね」

「じゃあ普段は近距離？」

「そう。ダガーは任せるよ」

「分かった！」

美波が投げナイフをやってくれたらなあ……そんな欲張るもんじゃないか。

「お兄ちゃん、駅着くよ?」

「あ、分かった」

横浜駅は3番線に到着。次は東海道線の6番線普通平塚行き。

「蒼くん、あのね、私頑張る!蒼くんに勝てるように」

「今言うか」

俺は美波を撫でて言った。

「俺も、負けないからな」

俺は美波を家の中に入れ、風呂に入らせて、寝かせて。まるで子ども世話のようなことをした。

「おやすみ、美波」

俺は自分の部屋に入り、infinite worldに入った。

「お久しぶりです。Souさん」

久しぶり、エム。最近入ってなかったな

「ホントですよ。あ、入ってない間にアップデートがありましたよ」

本当か?という内容なんだ

「えつとですね、大きく言うと、レベル上限の引き上げ、剣のスキル追加、片手直剣の攻撃力調整ですかね」

片手直剣の攻撃力調整?少し詳しく教えてくれ

「はい。今まで、同じ剣を強化させると、明らか合っていない攻撃力になってたりしていたんですが、今回から前回の攻撃力に65%プラスした攻撃力になるんです」

俺の剣の攻撃力は何か変わるか

「いえ、変化はありません。あと、体力に関して何ですが、3日間ログインしていなかったので10低下しました」

体力の低下!?上げる方法はないのか

「二応低下を防ぐ効果を持つ防具はあるんですが、今持ってませんね。上げる方法はレベルアップだけです」

そうか……あれ、さつき、レベル上限の引き上げて言ってたよな。何まで引き上げられたんだ

「今まで、レベル75が上限でした。しかし、今回から100までになりました」

そうか。じゃあ俺にはまだ関係ないな

「ですが、経験値ボーナスがSouさんは1日に1000入るので、300上がってます。なので、あと50でレベル8ですよ」

分かった。ありがとう。少しレベリングしてくる

「いってらっしゃい、Souさん」

俺はいつも通り宿屋からフィールドに出た。夜でそんなに人は居ない。

「じゃあ、ちよつと実験台になってくれよっ」

俺はアプデ後初めて敵を斬った。少し剣が重くなったか？あと、なんか「スキル」ってやつが追加されたらしいが、これかな。

俺はスキルを頭の中でイメージして、剣を振った。

すると、勝手に流れで剣が動き、俺は4回剣を振っていた。水色の四角い残像が見え、割れるように消えた。

「すごいな、これ」

俺はあつたスキルを見ようとした。

「あつと、もう1時か」

俺はすぐに現実世界に帰った。

第8話 Expulsion

もう1時だった。25時。明日は早起きして仕事済ませないとなあ。4時起きかな。じゃあもうオールすつか。

ということ、俺は徹夜することにした。今寝て、4時に起きれる気がしない。

「テレビも面白くないしなあ。infinite worldにいた方がよかったか」

俺は再び戻った。もちろんだが、もうほとんど人はいない。

俺はレベル8になり、体力も戻った。そして、不思議な剣を手に入れた。「infinite sword」だった。ゲーム名にちなんだ名前だろう。

「攻撃力+1350!？」

今より500多い。かつ、これと似たようなもので、グリヒスソードもあり、これだってinfinite swordと同等で、攻撃力は+1400。

「なるほど、二刀流始めるか」

俺は二刀流を始めた。二刀流はバフとして、俊敏力+5%、攻撃力+10%が付与される。

「俺だって、やってやるさ」

戦力は4561。もう結構強くなったな。

「攻略組……」

戦力などは聞いていない。ただ、ゲームの趣旨に合わない行動は明らかに違反行為。うる覚えであるが、利用規約にも、「ゲーム内の普段行わない行動、及び、通路でない場所を使いダンジョンを攻略することとは違反行為と見なす」など書かれていた気がする。これが明るみに出れば、攻略組はゲーム内追放となるだろう。

ここは、俺が進めよう。その前に、組織が必要となる。というわけで。

午前3時、攻略組追放賛成組織を作ることにした。名前はそのままだとまずいため、攻略賛成組織と変え、いかにも賛成するような名前

にした。

もちろん、攻略組には非公開。内容は、攻略組の違反行為を根拠を出し、追放する。というもの。

午前4時から俺は仕事をやり、午前7時半に戻った。すると、参加希望人数は5人。合計人数は最低7人を目標にしたため、簡単だった。あとはパーティーの人たちを入れれば、8人になる。

「あなたが攻略賛成組織を立ち上げた方ですか」

後ろに男の人がいた。

「ああ。そうだ」

「ありがとうございます！」

男の人は俺の手を握り、上下に激しく揺さぶった。

「俺の仲間が、攻略組によって監禁されたんだ。それで、どうにかして攻略組を追放したいと思っていたんだ！いやあ、本当にありがとう！」

「あ、ああ。よろしくな、俺はSou」

「俺はHill。これからよろしくな」

よかった。仲間がいてくれて。

攻略賛成組織は、合計9人になった。パーティーメンバーとあの武器店の人。健二は武器店が忙しいらしい。

「みんな、ありがとう。この組織は先頭は少ないが、根拠を求める。根拠を元に、攻略組を追放するのが目的だ」

「1つ質問いいか」

「いいぞ」

俺は質問を許可した。

「今、俺たちは攻略組の情報を知らない。今は何層まで行っているんだ」

「2日前の情報だと、35階層だ」

周りがざわつく。35階層はゲーム開始日からでも無理だ。というか、1日に2階層も進めないことが多い。これも、外壁を登っているためだ。

「今新しい情報入ったよ！」

美波が言った。

「今の時点で、42階層のボスを倒したって情報が入った」

「2日で7階層分も登ったのか!？」

「あり得なかった。1日で3階層ほど登ってるということだ。」

「外壁の凹凸を利用したって」

「そうか。じゃあ、利用規約取ってこようか」

「俺は利用規約の書類を取り行き、すぐに戻った。」

「第15条、ダンジョンの外壁を使用する行為は禁止する。また、ダンジョンのボスをカットすることも禁止とする。目撃、証拠がある場合は追放する」

「簡単に言ったらこんなことで、書いてあったのは」

「第15条 攻略施設の外壁を使用、及び攻略施設における強敵モンスターについて、討伐完了する前に次の階へ向かうことは禁止する。発見、筋のある根拠が示された場合、該当プレイヤーを追放する」ということだった。

「今回の場合、まだニュースで示されたただけだ。だったら、俺たちが実際にダンジョン周辺の森林に隠れて偵察する」

「まわりは賛成してくれた。」

「もちろん！追放しましょ」

「みんな恨みがあるんだろう。」

第9話 Unknown Bow

しかし、追放するにも条件があった。まず、俺たちが証拠を残さなければならぬ。それが1番大変だ。

結局、しばらく先になった。決行日は1週間後、全員で参加になる。それまでは自由な時間を過ごせた。しかし、話し合いが終わった後で、俺は健二の元に向かった。

「健二、きてやったぞ」

「おう、よく来てくれた」

健二は工房から1つの弓を持ってきた。

「この弓なんだが、攻撃力が不思議でな、それに、付与スキルも不思議なんだ」

「どれ……」

俺はその弓のスキルを見た。

攻撃力が100+レベルに応じて変化

付与スキルが、装備者の隠れた能力によって変化

俺が見ても、どういうことなのか分からなかった。弓を使うんだったら有希が使うが、有希が持つてる能力ってなんだ？

「一応試しに使ってみたいんだけど、いいか」

「構わない。買う人なんていないからな」

俺はその弓をストレージに入れ、有希に持っていった。

有希はなぜか森林に1人でいた。ブツブツと何かを言っていたが、内容は分からなかった。

「有希」

「あ、蒼くん」

「この弓、能力なんてなってる？」

有希は俺が渡した弓を見る。

「えっと、攻撃力450、スキルは射撃速度増加、だけど」

それが有希にあった隠れた能力、ってことか？

「あ、あと、インビジブルっていうのがある」

なんだそれ。

「透明みたいな感じか？」

「多分」

有希はじーつとステータスを見ていた。俺が少し歩くと、有希は俺の腕にしがみつく。2つに集中してるの？

「蒼くんっ」

「なんでしよう」

「はなれないのっ」

有希は笑顔で言った。ステータスを閉じると、有希は弓を敵に一発撃った。

途中で矢が消え、敵の前になって再び現れた。インビジブルってこういうことか。

「すごいっ！これ使いたい！」

「健二に聞いてくるか。一緒に来るか？」

有希は俺の背中に乗った。多分行きたいんだろう。俺は有希を乗せたまま健二の店に向かった。

俺たちが着くと、健二は工房から出てきた。

「おう、どうした」

「ああ、この弓買おうかと」

「分かった。10c00……と言いたいところだが」

健二は苦しそうな表情をした。

「なんだ、高いか。流石に」

「いや、無料でやる。この弓を複製して販売するより利益が見込めるからな。これも蒼たちが依頼をこなしてくれるおかげだな」

そう言つて、健二は俺が出した弓を返した。そして、それと一緒に紙を渡す。

「悪い、今鉄が不足してるんだ。銅のダガーを報酬に行ってきてくれないか」

「早速依頼か。ああ、別にいいよ」

鉄塊を250個。数だけ見ると多く見えるが、実際は敵1体当たり30個前後入手できるからそんなに多くはない。およそ9体同じ敵を倒せば250個はいける。

「銅のダガーって、強いの？」

「物によるが、な」

銅を使った防具は聞いたことがある。ただ、武器は聞いたことがなかった。

「耐久はあるし、攻撃力も平均以上。ただ、ダガーの中では軽いな」

美波にはもってこいだろう。

「じゃあ、パツパと行ってくる。15分くらいでまた戻る」

「あのな、これでも10体近く倒さなきゃいけないんだ。誰だって2人で行っても30分はかかるぜ」

「なに、1人5体倒せばいいだけだろ？」

俺は有希と一緒に敵を倒しに行った。

早速弓を使ってみている有希だが、初めてなのにかなり上手い。

「有希、結構使いこなしてるな！」

「慣れちゃった！」

有希は俺の上にある木から攻撃していた。俺は最近入手した剣を使って倒していた。

約束通り15分後、俺は健二の店に戻った。

「健二、鉄塊310個」

「依頼より多いが、まあいいか。サンキュー。約束通り銅のダガーな」

健二は銅のダガーを俺に渡した。

「美波にあげな。じゃ、またな」

「ああ。また後で」

俺は美波に銅のダガーを渡しに行った。

第10話 The cutest

美波は銅のダガーを貰って、嬉しそうだった。ぴよんぴよん跳ねて、俺に抱きついた。

「美波ちゃん!?何してるの!?!」

有希が慌てて美波を離れた。美波は抵抗して、俺にくつつこうとした。

「じゃあ、間を取って私にくつつく」

そう言ったのは、あの武器店の女の人だった。今気付いたけど、なんかすごい若くね?」

「あの、若いですね」

「若いつていうか、まだリアルでも20になってないもん」

ああ、そういうことか。

「そりゃあ若いね。名前は?」

「由月。本名そのまま」

由月は俺の肩に手をかけてぶら下がっていた。

「なんでみんな蒼くんにあまえるのーっ!」

有希の声が響き渡る。

それから、有希は頬を膨らませていじけていた。

「有希、許してくれないか?」

「ぶーっ」

有希は不貞腐れていた。頬を膨らませてるのがかわいいけど、言つたところで逆効果だろう。

「有希、俺は有希の俺だろ?」

「そうだけど……他の人とべったりなの、嫌……」

それだけ俺のことが好きなのは嬉しいけど、俺が有希以外の人と仲良くしすぎたかな。

「ごめんね、俺は有希が1番だから」

俺は有希にハグした。有希は俺の頬にキスして、恐らくもう仲直りできた。

現実世界に戻った俺は、有希の部屋でずっと一緒にくつついてい

た。まるで新婚夫婦のように、ずっと1m以内にいる感じだった。

「蒼くん、あーんして?」

「あーん」

有希は俺の口の中にグミを1つ入れた。

「おいしい」

「私を作ったのじゃないけどね」

有希は笑いながら言った。

「あつ、夕飯作らないと」

「付いてくか」

俺は有希のすぐ後ろをついていった。有希はたまに速く歩いたりして、楽しくしていた。

「有希、今日の夕飯は」

「えー?どうしよつかなー」

「教えてくれないと耳噛むよ」

「えー?おしえなーいつ」

俺は唇で有希の耳を啜えた。

「ひゃうっ!」

「言っただろ?」

「むーっ、仕返し!」

有希が俺の耳を甘噛みした。

「うわっ」

「えへへー、仕返さないと」

有希は手を引っ張ってキッチンへ俺を連れて行く。

有希は野菜を切っていて、キッチンを動き回っていた。有希は俺の方を見ること無くひたすら料理を作っていた。

(暇だなあ……)

俺はキッチンへ向かい、有希に後ろから抱きついた。

「ちよっと、危ないよ」

「暇だったからさ。ちよっと補充させて」

「10分以内だよ?」

有希は結構多く時間を取ってくれた。有希も俺に抵抗することが

なかつたから、有希もしたかつたんだろう。

「作り終わったら蒼くんに甘えるから」

「分かった。いつでもいいよ」

俺は有希に抱きついたまま言った。

第11話 裏切り

それから1ヶ月が経った。

少し遅れたが、攻略組の討伐の準備が行われた。俺はガンシヨップに行き、先の銃と弾を買った。数がすごいことになっているが。

「弾が5600、銃がS16型を3つね。聞いたわ、攻略組の討伐だった?」

「そんなとこだ」

「そう。それにしても弾がありすぎる気もするけど」

「万能のやつを買ったからな。咲希以外にも使わせる」

ガンシヨップの店員は結構優しい。仲もいいし。

「そうだ、ちよつと見せてくれない? 魔法」

「いいよ」

俺は浮遊魔法で浮いて見せた。

「それを使うの?」

「そうだな。相手は塔を上ってるわけだし」

1番効率がいいことだろう。

「じゃあ、ちよつと1発かましてあげて」

そう言つて、店員は物騒な物を俺に渡した。

「あのなあ、いくら破壊しないからつて、グレネードを手渡しするなよ……」

「落とさないでね。衝撃で爆発するから」

ホントに物騒だな。

「はいよ。じゃ、勝ってくるわ」

俺はガンシヨップをあとにした。あれ、よく考えたら俺、今物騒な物しか持ってない? 銃にその弾、さらにグレネード。怖すぎだろ。

俺が追放組織の拠点に着くと、俺はグレネード以外をストレージから出し、咲希に全て渡した。

「弾、すごいあるね」

「5600発だからな」

「そんなにいるの?」

「分からん」

俺は咲希にそう言うと、上を見上げた。ここは攻略組がいる塔の近くにある森。その中に大きなテントをたてている。

「蒼くん？」

「ああ、そんなにいないといいなつて」

俺はもう、そんなことを願うだけだった。

夜中。もう外は暗くなり、静かになった。しかし、そんな中で、草を踏む音が聞こえた。虫じゃない、何か大きい生き物。動物、人間……

ジーッ

テントの扉が開いた。俺はすぐに銃を準備した。

「誰だ」

返事がない。なんだ、人間なはずなのに。

バンッ

テントの壁を貫通した。やはり、人間だ。

バンッ

もう1発。俺はすかさず銃を撃った。

「……馬鹿だな……」

そんな声が聞こえた。

「どういうことだ」

「組織を信じすぎだ」

組織？俺が疑問に思っていると、周りから多くの物音が聞こえてきた。

「仲間なわけないだろ」

「ここまで多くの人を集めた。多く殺せるじゃないか」

「っ！」

「このダガーを使えば、現実世界にも傷がつく。さあ、遊ぼうぜ」

俺は追放する弾が入った銃を持った。しかし、すぐに取り上げられ、俺は……

痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い痛い。

呼吸がづらい。したくない。だけど、しないと死ぬ。

動けない。体が動かない。

内側からの鍵が部屋にかかっているのに、動けないって……

「終わった……っ」

まだ痛かった。

もう、無理なんじゃないか。助けなんて

「蒼くんの手当しないと。咲希、包帯持ってきて。あと塗り薬も一応」

「うん。お姉ちゃんは何するの」

「一応絆創膏とか持ってくる。切り傷が小さいのもあると思うし」

「分かった」

外で慌ただしく動いているのが聞こえた。外からドアは開けられない。窓だつて割れにくい構造だし、鍵も閉まっている。入る手段がない。

俺はドアの近くまでどうにかして行こうとした。

「あがつ……」

ベットから落下した。力が入らなかった。

「なんか音した！」

気付いたか。開けないと入れない……俺は開けようと必死だった。体を床に引きずっていったが、10cmくらいで流血していたことに気が付き、結局断念。床に血がついていた。

「蒼くん！」

ドアをたたく音が聞こえる。俺はまた体を引きずって進んだ。少しずつ、少しずつ。

2分ほどかけてドアまで辿り着いた。俺はすぐに鍵を開けた。しかし、俺はもう立てず、その場に倒れた。その音に気付いたのか、ドアが開き、明かりが差した。

「蒼くん！大丈夫！」

「お兄ちゃん、一回ベット行こ」

俺は咲希と有希の肩を借りてベットに戻った。